

---

プロジェクト **ASAF 対応**

項目 **のれん及び減損－IASB スタッフによるのれんの減損テストの有効性を改善する提案**

---

## 本資料の目的

1. 本資料は、2017年9月の会計基準アドバイザー・フォーラム（ASAF）会議資料とされている、国際会計基準審議会（IASB）ののれん及び減損に関するリサーチ・プロジェクトに関連して、IASB スタッフによるのれんの減損テストの有効性を改善する提案をご紹介するとともに、ASAF 会議における ASBJ 事務局の発言案について、ご意見をいただくことを目的としている。

## 本セッションの目的

2. 今回の ASAF 会議における、IASB スタッフによる提案を紹介するセッションの目的は、次ののれん及び減損に関する IASB リサーチ・プロジェクトの目的のうち、(2) について議論することとされている。
  - (1) コストが便益を上回ることなく利用者に提供される情報の質を改善する
  - (2) 利用者への情報を失うことなく減損テストを簡素化し適用を改善する
  - (3) 企業結合における特定の識別可能な無形資産をのれんから区別することを簡素化する

## 議論の背景

3. 現行の IAS 第 36 号「資産の減損」の要求事項として次の事項が紹介されている。
  - (1) のれんは償却されない
  - (2) 年次で、及び減損の兆候がある場合はいつでも、定量的な減損テストを行う
  - (3) 回収可能価額は毎年算定する
4. 減損テストの改善は、利用者が次の点に懸念を有していることを理由とするものである。
  - (1) 使用価値（VIU）が企業固有の性質を有しており、減損テストを回避する余地がある

- (2) 減損損失の認識のタイミングが遅く、金額が少ない(いわゆる「too little too late」の問題)
- 5. 減損テストの改善に関連して、次の IASB が現在進行形中のリサーチが紹介されている。
  - (1) 「too little too late」の問題の原因の一つとして識別されている自己創設のれんがのれんの減損を覆い隠す効果(shielding effect)への対処
  - (2) のれんの減損を覆い隠す効果を除去する手段の検討
  - (3) 回収可能価額の算定に、処分コスト控除後の公正価値 (FVLCD) 又は VIU のいずれか高い方ではなく、単一のモデルを使用すること

### 過去の ASAF 会議での議論

- 6. 2015 年 12 月開催の ASAF 会議では、IASB ボードの初期的な議論及び本プロジェクトの進め方に対する見解が求められた。ASAF メンバーからは、主に次の見解が聞かれた。
  - (1) 減損のみアプローチを支持するメンバーもいれば、償却及び減損アプローチを支持するメンバーもあり、見解は入り混じっていた。
  - (2) 利用者にとっての現行の開示情報の便益と、作成者が要求事項を適用するためのコストとの比較を重視し、利用者が求める情報について検討すべきである。
  - (3) 改善された減損テストは、のれんの会計処理のアプローチにかかわらず要求されることになるため、まずは減損テストの改善に焦点を当てるべきである。
  - (4) ASAF メンバーの一部は、減損のみのアプローチが継続される場合には、堅牢な減損テストが維持される必要があると考えていた。
- 7. 2016 年 7 月開催の ASAF 会議では、欧州財務報告諮問グループ (EFRAG) と ASBJ スタッフより紹介された、過去 10 年間ののれん、無形資産及び減損費用の推移についての定量的調査に対する見解が求められた。ASAF メンバーからは、主に次の見解が聞かれた。
  - (1) 調査の目的と課題を明確に特定する必要があるのではないか。
  - (2) 当該調査が、自己創設無形資産に関する十分な情報を提供しているかどうか疑問である。

- (3) のれんは少数の企業に集中しているため、のれんの平均値に基づいてのれんを分析することは困難である。
  - (4) 企業結合の事例毎ののれん分析、及び業界別ののれんの分析を行うことを提案する。
8. 2017年7月開催のASAF会議では、IASBスタッフ及びASBJによる、のれんの減損テストの簡素化及び有効性の改善に関する検討に対する見解が求められた。ASAFメンバーからは、主に次の見解が聞かれた。
- (1) 償却及び減損アプローチと減損のみアプローチの選択を認めるASBJの案については、比較可能性の低下及びその他の懸念から全体的に支持されなかった。
  - (2) のれんの減損テストを簡素化し改善するための単一アプローチ及び兆候のみアプローチによる減損テストについては、見解が入り混じっていた。

## PHアプローチ

### (のれんの減損を覆い隠す効果の例)

9. 既存のCGUの企業結合前の自己創設のれん又は資産が、購入のれんの減損を覆い隠す効果を説明するために、企業結合における可能性のあるケースとして次の2つのケースが紹介されている。

#### ケース1

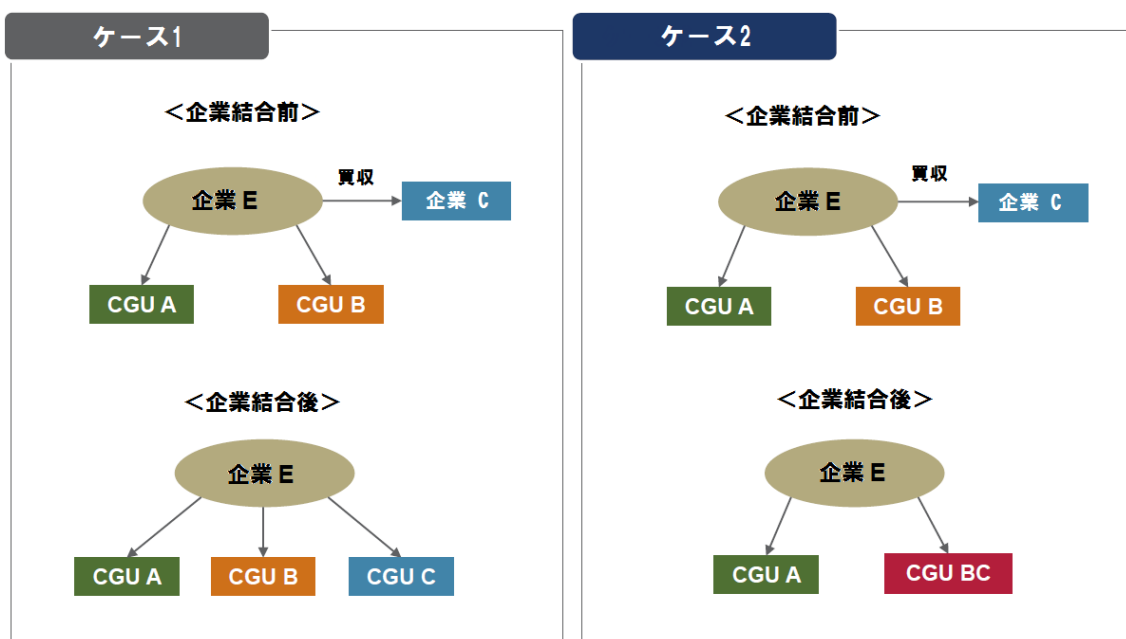
- (1) 企業Eが取得した企業Cは、個別の資金生成単位（以下「CGU」という。）である。
- (2) 購入のれんはすべて当該CGUに配分されると仮定する。
- (3) 購入のれんの減損を覆い隠す、未認識の取得前自己創設資産又はのれんは存在しない。
- (4) 新たに発生する企業Cの自己創設のれんが、購入のれんの減損を覆い隠すことはあり得る。

#### ケース2

- (1) 企業Eが取得した企業Cは、個別のCGUではない。
- (2) 企業Eの既存のCGU Bと企業Cは、1つのCGU (CGU BC) としてグループ化さ

れ、購入のれんはすべて CGU BC に配分される。

- (3) 新たな CGU BC は、CGU B の未認識の取得前自己創設資産及びのれん (PH) を含む (もしあれば)。
- (4) CGU B の PH は、新たな CGU BC の回収可能価額におけるマイナスの変動を吸収することにより、購入のれんの減損を覆い隠す。
- (5) CGU BC に新たに発生する自己創設のれんが、購入のれんの減損を覆い隠すこともあり得る。



**(PH アプローチがどのように機能するか)**

- 10. PH アプローチは、既存の CGU の取得前自己創設のれん又は資産が購入のれんの減損を覆い隠す効果を排除する目的で開発された。

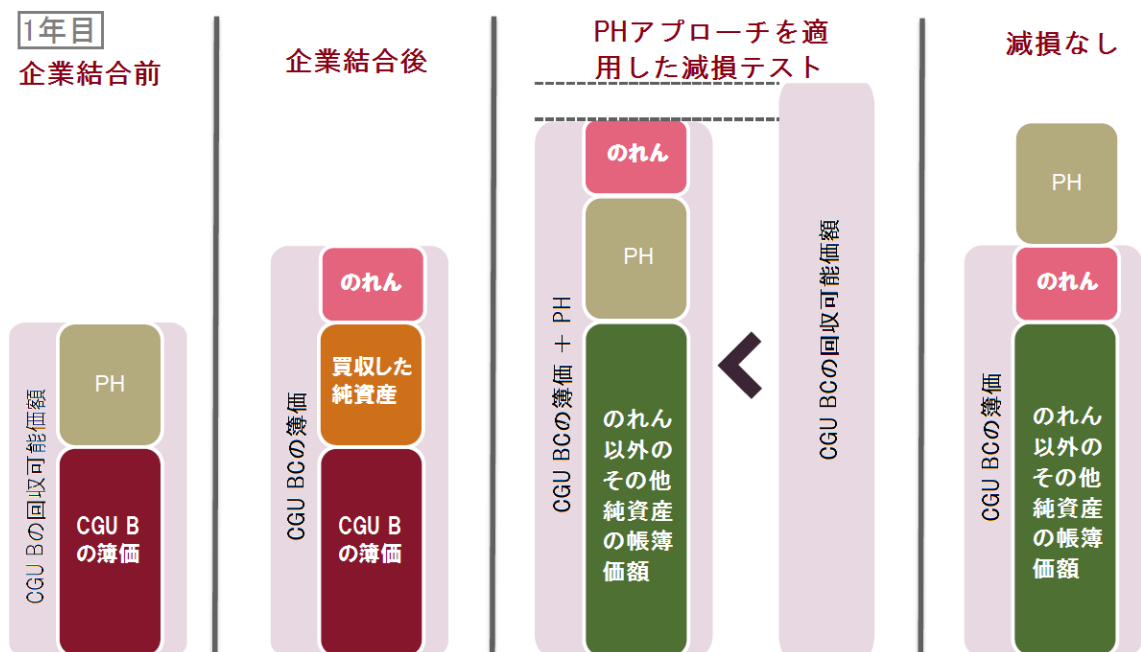


11. PHアプローチの基本的な仕組みは次のとおりである。

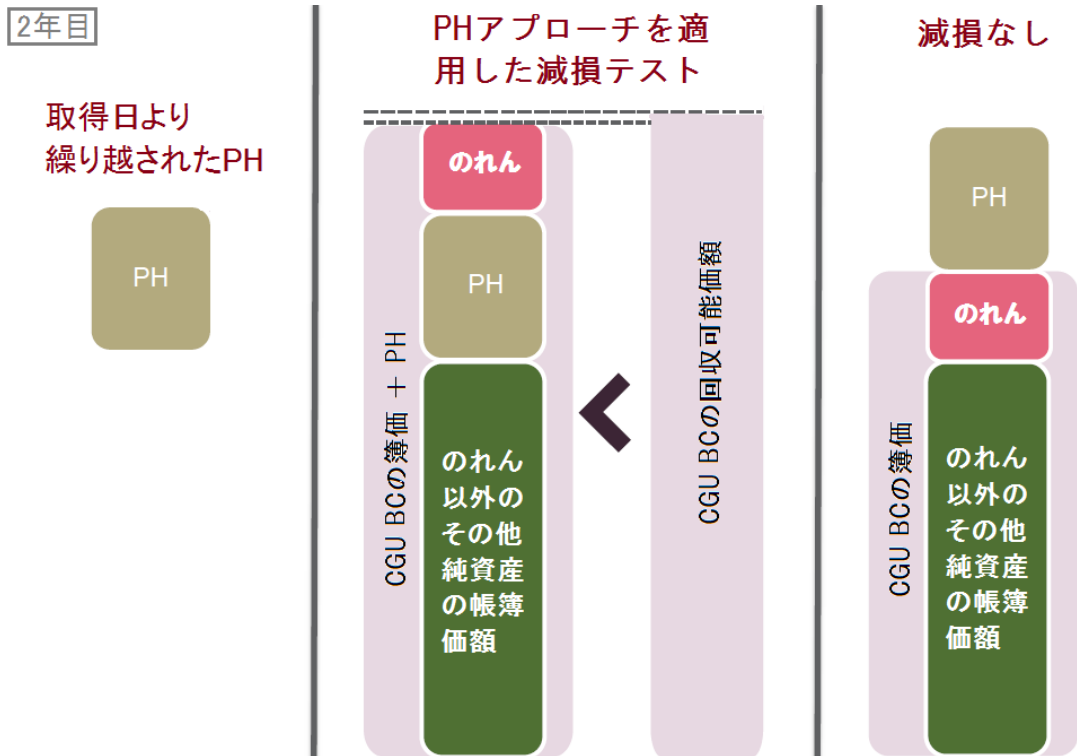
- (1) 取得の直前に CGU B の PH を測定する（PH が財務諸表に認識されることはない）。
- (2) 当該 PH を CGU BC の減損テストが行われるたびに CGU BC の簿価に加える（PH は減損テストの目的においてのみ加味される）。
- (3) 減損損失の算定において、PH を加えた CGU BC の簿価と CGU BC の回収可能価額とを比較する。

12. PHアプローチの適用の具体例は次のとおりである。

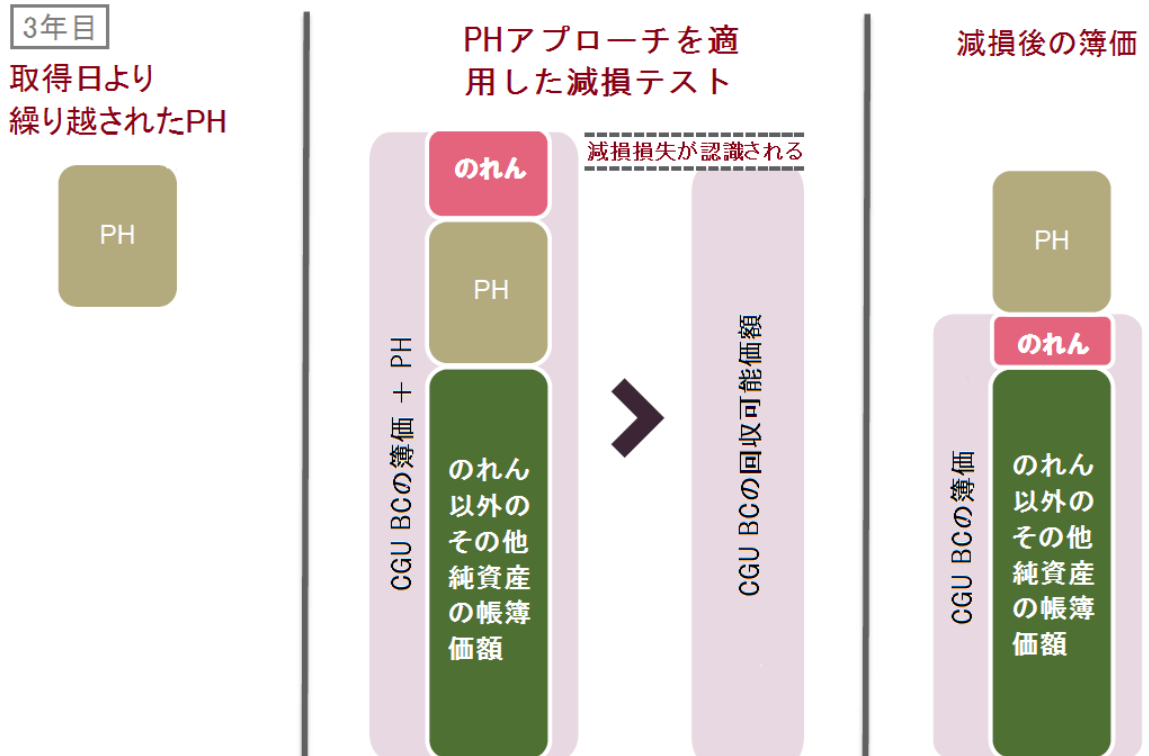
- (1) 1年目：CGU BC の減損テストにおいて、CGU BC ののれん以外の純資産の帳簿価額及びのれんの帳簿価額に取得の直前に算定された CGU B の PH を加えた額を CGU BC の回収可能価額と比較した結果、減損損失は認識されなかった。



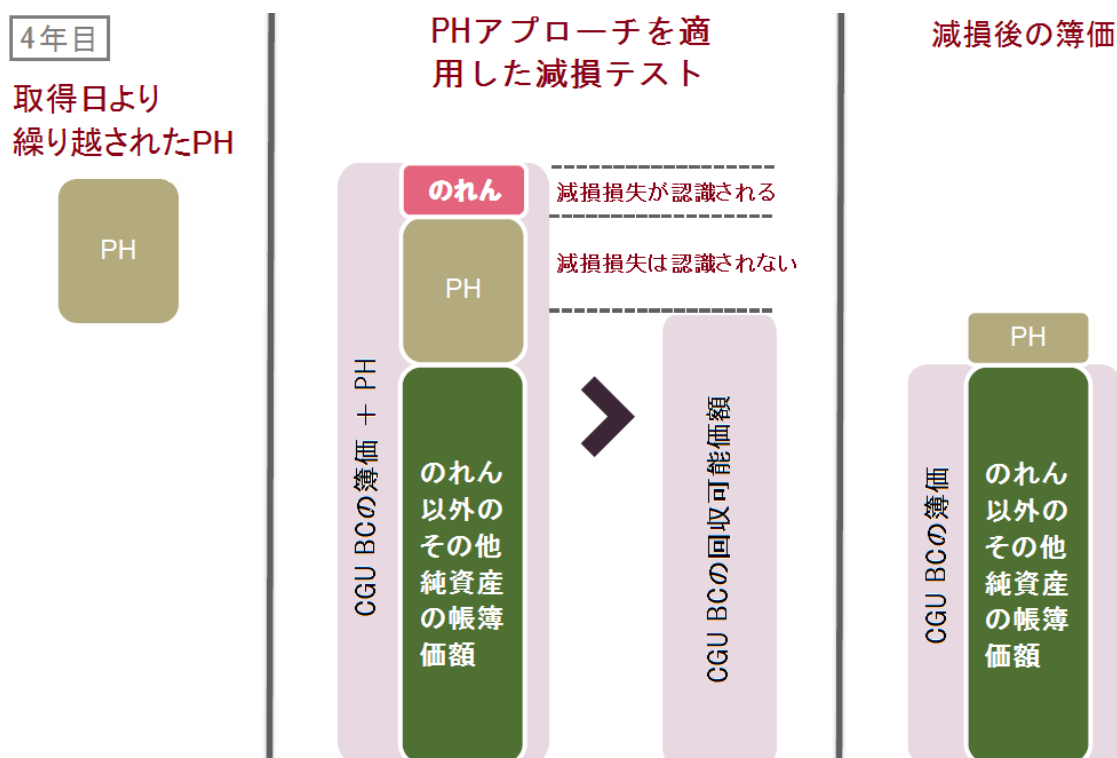
(2) 2年目：取得日より繰り越されたPHをCGU BCののれん及びのれん以外の純資産の帳簿価額に加えた額を回収可能価額と比較した結果、減損損失は認識されなかった。



- (3) 3年目：取得日より繰り越されたPHをCGU BCののれん及びのれん以外の純資産の帳簿価額に加えた額に対して、回収可能価額が下回ったため、差額がのれんの減損として認識される。のれんの帳簿価額は、減損損失相当額だけ減額される。



- (4) 4年目：3年目までと同様に、PHを加えて減損テストを行った結果、測定された減損損失の金額がのれんの帳簿価額よりも大きくなった。この場合、のれんの帳簿価額の全額を減損損失として認識し、残りの減損損失相当額はPHから減額する。ただし、当該PHの減額分は財務諸表に認識されない。



#### (PHアプローチの良い点と悪い点)

13. PHアプローチの良い点として次の点が挙げられている。
- (1) 減損損失をより早く認識する結果となる。
  - (2) PHの測定は企業結合時の1回限りのコストとなる。
  - (3) 企業結合後の最初のPHアプローチによる減損テストは、PHが測定されて間もなく実施されるため最も効果的となる。
14. PHアプローチの悪い点として次の点が挙げられる。
- (1) 企業結合時にPHが決定され、その後アップデートされないため、企業結合後に新たに発生するのれんがのれんの減損を覆い隠す効果を排除できない。
  - (2) PHアプローチは減損テストの複雑性を増加させる。



**(ASAF メンバーへの質問事項)**

15. 2017年9月開催のASAF会議におけるASAFメンバーへの質問事項は、次のとおりである。

- (1) PHアプローチの使用は減損テストの有効性を改善することができるか。
- (2) PHアプローチの技法を改善する提案又はコメントはあるか。

**(ASAF 会議における ASBJ 事務局の発言案)**

16. ASAF 会議における ASBJ 事務局の発言案は、次のとおりである。

PHアプローチが減損テストの有効性を改善できるかどうかに対する見解

- (1) 「too little too late」への問題に対処するために、のれんの減損モデルの改善を検討する場合には、改善後の減損モデルによって提供される情報が、財務諸表利用者にとって目的適合性が高いものであるかを議論する必要があると考える。この点、PHアプローチは、減損後の帳簿価額が回収可能価額を表さなくなるため、財務諸表利用者への目的適合的な情報の観点から説明することが困難であると考えられる。
- (2) PHの価額の算定のために求められる、既存CGUの企業結合前の回収可能価額を計算することは、部分的に自己創設のれんを計算するものであり、一般的に、測定の信頼性が懸念されることが考えられる。

**単一モデルによる回収可能価額の算定**

17. FVLCD 又は VIU のいずれか高い金額としてではなく、単一モデルで回収可能価額を算定する方法として、IASB スタッフは、次の3つを検討している。

- (1) FVLCD のみを基礎とする方法
- (2) VIU のみを基礎とする方法
- (3) 企業が資産の回収を見込んでいる方法に応じて FVLCD 又は VIU のいずれかを基礎とする方法

18. IASB スタッフは、単一モデルによる回収可能価額の算定を巡る議論として、次の4つを紹介している。

- (1) 少数の利用者からのフィードバックとして、VIU は企業固有の性質を持つもの

であり、経営者に減損テストを回避する余地を与えるとの懸念と、公正価値に基づく減損モデルにより客観性があると見解が寄せられている。

- (2) 少数の作成者からのフィードバックとして、VIU は企業が事業において継続して使用するために資産を保有しているという事実をよりよく表しており、VIU は FVLCD と同様に単なる最善のシナリオではなく、幅広い経済状況を反映したものであると見解が寄せられている。
- (3) 他のフィードバックとして、少数の監査人から VIU の算定に使用される経営者の最善の見積りに反論することは困難であるとの懸念が示されている。
- (4) IASB スタッフは、単一モデルの使用は、減損テストの有効性を改善し、減損テストの適用と理解をより容易にし、現在のモデルが減損を覆い隠すこと及び（又は）減損の認識を遅らせるという懸念を緩和する可能性があると考えている。

#### (VIU と FVLCD とが互いに近似する可能性)

19. IASB スタッフは、次の表において VIU 及び FVLCD のそれぞれの算定方法を整理し、IASB スタッフの見解を示している。

	VIU の算定	FVLCD の算定	IASB スタッフの見解
全体のアプローチ	経営者の最善の見積り	レベル 3 インプット	レベル 3 インプットは経営者の最善の見積もりと著しく異なる可能性があり
評価モデル	割引キャッシュ・フロー	一般的に割引キャッシュ・フロー技法に基づく	
キャッシュ・フロー予測	<ul style="list-style-type: none"> <li>合理的で裏付け可能な仮定及び外部証拠を重視</li> <li>予想される将来のリストラクチャリング又は資産の性能の改善又は拡張をキャッシュ・フローに含めることを禁止</li> </ul>	すべてのキャッシュ・フロー予測は利用可能な最良の情報を使用し、その情報には、企業固有の情報及び合理的で利用可能な市場参加者の前提が含まれるかもしれない	<ul style="list-style-type: none"> <li>キャッシュ・フロー予測は、VIU 算定において禁止されているキャッシュ・フローを除くと異なる可能性あり</li> <li>利害関係者からの VIU に関する禁止規定を除外する要請あり</li> <li>実務上、これら禁止規定が FVLCD と VIU との差を生じさ</li> </ul>

			せているかは不明確
割引率	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ IAS 第 36 号は税前の割引率の使用を要求</li> <li>・ 税前の割引率は意味がないとの利害関係者からのフィードバックあり</li> </ul>	税後の割引率が通常使用される	実務では、VIU 及び FVLCD の算定において同じ割引率が使用されている
企業固有のシナジー	含まれている	含まれていない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 議論の余地はあるが、FVLCD の算定ではなく、VIU の算定では考慮されるが FVLCD では考慮されないシナジーの存在が、会計単位 (CGU) の識別の問題を生じさせる可能性がある</li> <li>・ FVLCD の算定は、補完的な資産と関連する負債、及び資産を継続的な事業におけるグループとして使用する場合のシナジーを、市場参加者が利用可能であることを前提としている</li> </ul>
処分コスト	資産は将来 (おそらく、耐用年数の終了時点) 売却されることが想定されているため、処分コストは考慮され、割引される	資産は即時に売却されることが想定されているため、処分コストは考慮されるが、割引はされない	企業が資産の売却を決定した時点では、処分コストは VIU と FV の金額に差異を生じさせず、二つの金額が同じになる可能性が高い

#### (2017 年 7 月の ASAF 会議でのフィードバック)

20. 2017 年 7 月の ASAF 会議において、単一モデルによる回収可能価額の算定について次のような見解が聞かれた。

- (1) 単一モデルを検討する中で、IAS 第 36 号の範囲内の他の非流動資産への可能性

ある影響について考慮すべきである。

- (2) 実務において VIU と FVLCD に重大な差異があるか否かについて十分な証拠がない。
- (3) VIU は企業が事業における使用を計画している資産の価値をよりよく反映しており、レベル3の公正価値よりも客観性がないとは言い切れない。
- (4) ある業界は VIU の計算において特定のキャッシュ・フローの使用が禁止されているために、FVLCD の使用を好んでいる。

#### (ASAF メンバーへの質問事項)

21. 2017 年 9 月開催の ASAF 会議における ASAF メンバーへの質問事項は、次のとおりである。

- (1) 回収可能価額の算定を単一のモデル（すなわち、FVLCD 又は VIU）を用いて行うことで、減損テストの有効性が改善されると考えるか。
- (2) 多くの状況において FVLCD と VIU の計算結果が大きく異なる場合、いずれか高い金額を回収可能価額とする方法は必要か。

#### (ASAF 会議における ASBJ 事務局の発言案)

22. ASAF 会議における ASBJ 事務局の発言案は、次のとおりである。

##### 単一モデルが減損テストの有効性を改善するか。

- (1) 回収可能価額による減損の測定は、IAS 第 36 号の根幹となるコンセプトであり、のれんの減損テストに限定して異なる方法を適用することは適切ではなく、議論するのであれば他の資産も対象とした IAS 第 36 号自体の見直しが必要になると考えられる。
- (2) VIU の算定は経営者の最善の見積もりが使用されており、恣意性があることを問題視し、FVLCD にしたほうが減損テストが改善するとの意見があるが、客観性の程度については、レベル3のインプットを使用する FVLCD の算定と大差はないと考えられ、その点でのれんの減損テストの有効性の改善に繋がるとは言えないと考えられる。

##### FVLCD 及び VIU に大きな相違がない場合において、いずれか高い方を回収可能価額とする方法は必要か。

- (1) VIU と FVLCD が場合によっては近似する結果が得られる可能性は否定しないが、VIU と FVLCD のいずれか高い方を回収可能価額とするのはコンセプトの問題で

あり、近似し得ることが VIU 又は FVLCD のいずれかのみを測定すればよいとするのは適切ではないと考えられる。

**ディスカッション・ポイント**

のれん及び減損に関する論点の内容及び ASBJ 事務局の発言案について、ご質問やご意見があればいただきたい。

以 上